

条件節の統語分析

—日本語の事例に基づく欠落説と移動説の比較—

山田 彬堯

要旨

本稿の目的は、「条件節の分析として欠落説と移動説とを比較するならば、移動説の方が高い説明能力を持っているため優れている」という主張をすることにある。Haegeman (2003, 2006, 2009, 2010a, 2010b, 2013) は、条件節に対して、これまで、二つの異なる分析を唱えてきた。一つ目は、条件節における諸現象を機能範疇の欠如として説明する欠落説であり、二つ目は、オペレーターの移動と局所性から条件節の諸現象を説明する移動説である。彼女は、前者の枠組みから後者の枠組みへ説を乗り換えてきた。しかし、彼女の説の転換とは裏腹に、両者の説明能力は、むしろ拮抗しており、先行研究で挙げられたデータからだけでは、後者が前者に対して圧倒的優位に立っているとはいえない。これに対し、本稿では、日本語の条件節において「もし」と疑問語が生起できないという事実に注目する。そして、欠落説では捉えられないこの現象が、移動説の下では説明できることを指摘する。この説明能力の相対的な広さを根拠に、条件節の分析として欠落説と移動説を比較するならば、移動説の方が優れている、という主張を展開する。

キーワード：条件節，カートグラフィー，主観性表現，主題性表現，「もし」と疑問語の生起

1. イントロダクション

本稿の目的は、「条件節の分析として欠落説と移動説とを比較するならば、移動説の方が高い説明能力を持っているため優れている」という主張を展開することにある。

Haegeman (2003, 2006, 2009, 2010a, 2010b, 2013) は、主に印欧語の事例に立脚しながら、条件節の中における**主題化**と**主観性表現**（法副詞、法助動詞、発話行為副詞、証拠性副詞）の生起を論じてきた（= (1), Haegeman 2010a: 629-630）。

- (1) a. *If *these exams* you don't pass, you won't get the degree. [項の主題化]
- b. *John will do it if he *may/must* have time. [法要素]
- c. *If *frankly* he is unable to cope, we'll have to replace him. [発話行為副詞]
- d. *If they *luckily* arrived on time, we will be saved. [証拠性副詞]

主題化表現も主観性表現もともに主節に生起させることはできる。しかし、(1) が示すようにこれらを事象条件節の中に生起させることはできない。この条件節の異質性を説明するために、これまで大きく二つの仮説が立てられてきた。この二つの分析は、前期 Haegeman (2003, 2006) から後期 Haegeman (2008, 2009, 2010a, 2010b, 2013) へという Haegeman の論考の変遷に反映されている。前者は、機能範疇の欠落を想定し、条件節の諸現象を説明する分析である。これに対し、後者は Bhatt and Pancheva (2002, 2006) の考え方を発展させたもので、オペレーターの移動と局所性に基づく分析である(以降、前者を**欠落説**、後者を**移動説**と呼ぶ)。日本語の条件節に対しては、三原 (2012) が前者の欠落説に基づく分析を、また、遠藤 (2010, 2011, 2012) が後者の移動説に与する考え方を提示している。2 節の目的は、この両者の説明能力を比較、検証し、それぞれの有効性を慎重に評価することである。そして、これまで提示されてきたデータだけからでは移動説の優位性を強く主張できないとするのが穏当である、という見解を述べる。

本稿 3 節では、これまで指摘されてこなかった、条件節の統語的ふるまいに関する、ある日本語と英語の質的な違いにまで、考察対象を広げる。そして、この新しく考察対象に含めたデータに基づき、「条件節の分析として欠落説と移動説とを比較するならば、移動説の方が高い説明能力を持っているため優れている」と主張する。このデータ(現象)とは、「もし」が疑問詞とは共起できないというものである。英語と異なり、日本語の条件節には、疑問詞を生起させることができる(= (2) a)。しかし、「もし」が生じると条件節内に疑問詞を生起させることはできない(= (2) b)。3 節では、欠落説では説明できないこの現象が、移動説のパラダイムでは説明できることを示し、移動説の欠落説に対する優位性を指摘する。

- (2) a. いつ*(行けば) いいの? [「ば」に導かれる従属節では疑問語が生起可能]
 b. *もしいつ行けばいいの? [「もし」と疑問語は共起できない]

さて、イントロダクションの終わりに、本稿の議論の枠組みであるカートグラフィーについて簡単に述べておきたい。カートグラフィーは、生成された統語構造の精緻な記述を行う研究である。その理論的な礎は、主に本稿でたびたび言及される Haegeman に加え、Rizzi (1997)、Cinque (1999) によるところが大きい。前者は、主に、主題化や焦点化を記述するため、CP 領域を(3)のように精緻化し、後者は副詞の階層に反映される主観性の階層を(4)のように想定した。

- (3) [ForceP Force⁰ [TopP* Top⁰ [FocP Foc⁰ [TopP* Top⁰ [FinP Fin⁰ IP]]]]] (Rizzi 1997: 297)
 (4) Mood_{speech act} > Mood_{evaluative} > Mood_{evidential} > Mood_{epistemic} > T (past) ...

(Cinque 1999: 76 一部抜粋)

紙幅の都合で、本稿ではこのアプローチの詳細は割愛するが、全体的な総論は、Cinque and Rizzi (2008) を、また、日本語における解説は長谷川(編) (2010) や井上 (2009) を参照されたい。

2. 欠落説と移動説

2.1 欠落説

2.2.1 前期 Haegeman の説明

欠落説とここで呼ぶ考え方は、Haegeman (2003, 2006) で主張されたもので、概略、時や条件を表す副詞節の中では、いくつかの機能投射が欠如しているためその機能投射を必要とする言語現象が観察できないのだという説である¹。彼女は (5) の構造を仮定し、Force が存在しないことが原因で TopP と FocP も欠落してしまうのだと考えた。

- (5) Haegeman (2003: 332-333) (cf. (3))
- | | | | | | | | | | |
|----|--------|-------|---------|--------|---------|--------|--|--|-----|
| a. | 事象条件節: | Sub > | | | | | | | Fin |
| b. | 前提条件節: | Sub > | Force > | Top* > | Focus > | Top* > | | | Fin |
| c. | 主節: | | Force > | Top* > | Focus > | Top* > | | | Fin |

2.1.2 欠落説で説明できる現象

この枠組みは、第一に、**項の主題化**を説明することができる。例えば、Haegeman (2003) では、事象条件節と前提条件節を区別したうえで、事象条件節には、Force, Top, Focus が存在していないため、Top を目指して移動が行われる項の主題化 (= (6)) は生じないのだ、と説明する²。

- (6) *If these exams you don't pass, you won't get the degree. [= (1) a]

これに対して、前提条件節ではこれらの機能投射がそろっている。そのため、(7) に見るように、項の主題化が可能である (Haegeman 2003: 332)。

- (7) If his SYNTACTIC analysis we can't criticize, there is a lot to be said against the SEMANTICS of the paper.

条件節が、事象的か、前提的かという意味上の区別は、その条件節が併合 (merge) される統語的位置にも対応している。彼女は、事象的条件節と前提的条件節、そして主節の内部構造を (5) のように整理したうえで、条件節が持つ内部構造と条件節が併合される外部構造が相関しているという主張を行った (Haegeman 2003)。

第二に、欠落説は (1) b-d で例示されたような**法や発話行為、証拠性表現が条件節の中に生起できないという事実**に対しても説明を与えることができる。節の上部は (8) のような構造を有し条件節ではそのうちの少なくとも Mood_{epistemic} より上の部分が欠けている。機能範疇の欠如が原因で、これらの主観性表現は条件節内に生起することができない。これが欠落説の説明である。なお、後に見る三原 (2012) はこの欠落説に基づいて日本語の条件節を考察している。

- (8) Cinque (1999: 76) (一部抜粋)

Mood_{speech act} > Mood_{evaluative} > Mood_{evidential} > Mood_{epistemic} > T (past) ...

2.1.3 欠落説の問題点

次に、この議論の問題点を概観する。第一に、この議論は、**付加詞の主題化**を説明することができない。(5) aのように事象条件節に TopP が存在していないのであるとすれば、項であれ付加詞であれ、主題化させることができないという予測になる。しかし、下記の例に見るように、この予測に反して付加詞は主題化されていても、非文にはならないのである (Haegeman 2003: 333; Haegeman 2006: 1657)。

(9) *If with all these precautions you don't succeed, you will have to try again next week.*

そのため、彼女は、「前置された付加詞は Fin に付加されると仮定」し、(5) a との整合性を保とうとする。しかし、この仮定はあくまで理論内部の整合性を保つために導入された仮定でしかなく、なぜ主題化されたものが Fin に付加されなければならないのか、という点については、原理的な説明がなされていない。

第二に、同様の理由で欠落説は**ロマンス語における CLLD** (clitic-left dislocation) をも説明することができない。一部のロマンス語では、接辞 (clitic) を残せば、項であったとしても条件節内で前置が可能である (Haegeman 2010a: 632)。その着地点を TopP であるとすれば、条件節の中には TopP が欠落している以上、このような前置は非文をまねくはずである。しかし、これは事実と反する予測である。

(10) *Si ce livre-là tu le trouves à la Fnac, achète-le.*
if_{.COMP} this book-there you_{.2sg} it_{.CL} find_{.2sg} at_{.PREP} the_{.DET} FNAC buy_{.IMP} it_{.PR}
「あの本をもし Fnac で見つけたら、買いなさい」

もちろん、前期 Haegeman においてこの (10) の事例を扱える可能性がないわけではない。確かに、Haegeman (2003, 2006) には、CLLD についての言及はない。しかし、前置された付加詞が項の前置と異なる機能範疇に生起すると考えるのであるから、同様に、CLLD で前置された要素は、接辞を残さない項の前置とは異なり、条件節においても欠落しない部分に生起していると仮定し、(10) の現象を説明すること自体は、欠落説にも可能である。ただし、主題要素に対して複数の生起位置を仮定する別の独立した根拠が見つかるまでは、この説明は、現象をただ記述しただけにすぎないということになる。逆に、何らかの証拠が見つかりさえすれば説明に妥当性が生まれ、欠落説の妥当性は高まるということになる。現在のところそのような証拠は見つかっていない。そのため、欠落説は、現象を説明できる潜在的な可能性はあるが、現在のところは、この事例を十全に説明することはできない、ということになる。

2.2 移動説

2.2.1 後期 Haegeman の説明

後期 Haegeman は、Bhatt and Pancheva (2006) における条件節の分析に基づき、オペレーターの移動と局所性から、条件節の諸現象を説明しようと試みた。Bhatt and Pancheva

(2006) は、if 節を可能世界の自由関係節、すなわち先行詞のない関係節とみなし、オペレーターが CP 領域に移動することで条件節が構築されるとした。彼女はこの考え方を発展させ、オペレーターが下にある機能範疇から上位の機能範疇に移動することで条件節が作られると考えた。移動が起きる際には同じ素性を含む地点を通過できないという Rizzi (2004) の説く局所性を踏まえて、条件節を作る際に、移動するオペレーターと同じ素性を持つ、法要素、主題要素が移動の途中にある場合、その移動は妨害され、条件節は形成できなくなるのだと主張する。これが移動説による説明である。

ただし、どこから移動し、どこに着地するのかについては、後期 Haegeman において一貫性が見られない。もともと Bhatt and Pancheva (2006) が立てた表示は (11) のようなものだったが、Haegeman (2008, 2009, 2010a) において、彼女は最初に、FinP からの抜き出しを想定し(= (12))、その後、Haegeman (2010b: 606) においては Cinque (1999) が提示したカートグラフィーを基に Mood_{irrealis} からの抜き出しを仮定している(= (13))³。

(11) if John arrives late

a. LF: Op w C⁰ John arrives late in w

b. λw [John arrives late in w]

(12) * $[_{CP} OP_i$ if $[_{TopP}$ this book $_j$ $[_{FinP}$ ΘP_i $[_{IP}$ you... $[_{VP}$ find this book $_j]$]]]] (Haegeman 2010a)

(13) *MoodP_{speech act} > MoodP_{evaluative} > MoodP_{evidential} > MoodP_{epistemic} > TP_{past} > TP_{future} > MoodP_{irrealis} (Haegeman 2010b)

↑
└──┘

2.2.2 移動説の説明能力

ここでは後期 Haegeman に挙げられた四つの説明能力を概観する。第一は、**項の主題化**である。主題化された項は、談話を指向する[+ δ]に加え、オペレーターと同じ[+Q]素性を含む。これに対し、オペレーターは[+Q]という素性しか持たない。仮にオペレーターが主題化された項を超えようとする、[+Q]を持つ要素が[+Q][+ δ]を備えた要素を超えて移動することになる。例えば、(12) の例では、[+Q]を持つ this book を超えてオペレーターが移動することになる。しかし、Rizzi (2004) に説かれる局所性からこのような移動は排除される。従って非文となる (Haegeman 2010a: 640)。

第二は、**付加詞の主題化**と CLLD である。これらは前置された項とは別の素性を持つため、移動が妨げられないとされている (Haegeman 2010a: 640-641, 2010b: 599)。ただし、その具体的な素性については、Haegeman (2010a) では、特定化されていない。とはいえ、彼女は、CLLD は一般的な主題化要素とは、振る舞いが異なることから、両者に別の素性を想定することは、的を外れたことではないと述べている。

第三は、**法要素**との共起についてである。Haegeman (2010b) は、MoodP_{irrealis} と (13) に見られる高い機能範疇 (MoodP_{speech act} から ModP_{epistemic} にいたる機能範疇) は、同じ素

性を有していると仮定する。同じ素性を持つ機能範疇を超えての移動は許されない。それゆえ、オペレーターが、 $MoodP_{irrealis}$ の指定部から $MoodP_{speech\ act}$ より上に移動することは非文性を生む。これが彼女の説明である。

第四は、**語源的**なつながりである。Bhatt and Pancheva (2006: 657) においても指摘されていたが、彼女は英語では *when* と *if* のように異なる単語で表される条件節と時間節の標識が、ドイツ語では共に *wenn* として同一形態で具現化されること、そして、*when* には移動の元位置に基づく曖昧性が観察されることから、語源的なつながりを考慮すれば、*if* にも移動が関与していると考えてもよいだろうと述べている。(Haegeman 2010a: 637)

2.2.3 移動説の問題点

一つ目に、項とその他の要素で素性が異なることを主張できる強い証拠が見つかっていない。これでは、より精緻な検証が必要であるという点で、項の前置と CLLD に対して異なる機能範疇を想定する欠落説と変わりはない。二つ目に、移動の元の位置と移動先の位置がまだ経験的に立証されていない。三つ目に、語源的に同一のものが必ず同じ統語的ふるまいを示すはずだという推論には論理的な必然性がない。以上の三点から移動説が誤っているとまでは判断できない。しかし、主観化表現と主題表現という事例だけでは、移動説の優位性を強く主張することも、また、できないというべきである。

2.3 まとめ

以上、2.1 と 2.2 で概観した二つのアプローチをまとめると下記ようになる。

(14) 機能範疇欠落説と移動説の説明能力

	欠落説	移動説
項の主題化	TopP が存在しないため	主題化された項は[+Q][+δ]をもつ同じ[+Q]を持つ Op の移動を妨害
付加詞の主題化	TopP 以外の投射を想定	[+Q]を含まないため移動を許容
主観的要素	$Mood_{epistemic}$ より上位の機能投射が存在しないため	Mood 要素は[+Q]を持ち、局所性に違反
CLLD	*	[+Q]を含まないため
<i>wenn</i> の関係	特にコメントはない	語源的つながりを重視

Haegeman は、欠落説から移動説へと自説を転換した。しかし、前者の枠組みにも説明能力は存在し、また後者の枠組みにも解決されなければならない問題が存在する。従って、上記の観察だけから移動説に軍配を上げるのは早計であり、より広範なデータに

照らし、それぞれがどこまで説明能力を有しているかを検証することが必要である。続く3節では、そのような検証のデータとして、日本語の条件節の現象に注目する。そして、移動説はこの現象を説明できるのに対し、欠落説はそれができないため、印欧語と日本語で指摘されたデータに基づくならば、移動説のほうが説明能力の広さの点で優れているという主張を展開する。

3. 日本語の条件節

この節では、**主観性表現** (= 3.1)、**主題表現** (= 3.2) だけでは欠落説と移動説の優劣を論じられないことを日本語の事例で改めて確認し、次いで、しかし副用語「もし」 (= 3.3) に注目すると、移動説には現象を捉えられる力がある、ということを指摘する。

3.1 現象 (1) : 主観的表現

欠落説は Haegeman によって後に撤回されることになる。しかし、2節で見たように、欠落説にもそれなりの説明能力があった。この 3.1 では日本語の**主観性表現**について欠落説でも有効な説明ができるため、この説が全くの無能な説ではないことを確認する。ただし、この枠組みに沿った先行研究である三原 (2012) には三つの不備が存在する。そこで、3.1 では、3.1.1 で彼の説を概観し、3.1.2 においてその問題点を修正しながら、欠落説の説明能力を評価する。

3.1.1 三原 (2012) の説明

三原 (2012) は、前節で整理した枠組みでは、欠落説に属する。彼は日本語の代表的な補文標識である「れば」「たら」「と」「なら」の違いを、それが取る補部の大きさに求め説明する。例えば、「れば」は *vP* を補部に取り *v* 接辞であるため、それより上位の機能範疇を欠落させている。そのため、事象条件文の *if* が *frankly* のような発話行為副詞をとることができなかったように、この「れば」も「幸いにも」のような発話行為副詞をその補部の内部に生起させることができない。これが三原の説明である。同様に、文副詞、認識的モダリティ、主題「は」、「る」形、- (a) *na*、動詞の生起についても検討し、彼は (15) の結論を導いている (非文性の判断は三原 (2012) による)。

(15) 主張 (三原 2012: 3.7 節)

	れば／たら	と	なら
補部の大きさ	<i>vP</i> (NegP)	TP	ForceP
統語的価値	<i>v</i> 接辞	T 接辞	Force 接辞

- (16) 「れば」の補部が CP でないことの根拠
- a. (根拠 1) 高次副詞の生起
 - i. * 福井先生が幸いにも来てくれれば、参加者は大喜びするだろう。
 - ii. * 先生が確かにコメンテーターを務めてくれれば、シンポジウムは成功するだろう。
 - b. (根拠 2) 主要部に位置する法表現
 - i. * 巨大台風が上陸するかもしれないければ、海岸沿いは浸水の恐れが高い。
 - ii. * 巨大台風が上陸するらしければ、海岸沿いは浸水の恐れが高い。
 - c. (根拠 3) 主題
 - * 田中君は工学部に進学すれば、うちのクラスの理系進学者数は計 6 名になる。
- (17) 「れば」の補部が TP ではないことの根拠：時制形態素
- * 巨大台風が上陸するれば、海岸沿いは浸水の恐れが高い。
- (18) 「れば」の補部が vP であることの根拠：使役形態素
- 英文を読ませれば実力はすぐわかる。

3.1.2 三原 (2012) の問題点

以上のように三原は『る』という不定形の『形式』自体も現れない (三原 2012: 124) ことを根拠として、「れば」は TP 以上の機能範疇を持たない v 接辞であると結論付けている。しかし、この結論は以下の三点を考慮すれば早計である⁴。一つ目は**他の形態素分析の可能性**を看過している点である。確かに、「する」に「れば」を上接させた「*するれば」という表現は非文法的である。しかし、この議論には、条件を表す形態素を *-reba* とするという前提がある。だが、この前提は絶対的なものではない。西山 (2012: 158) が提案するように、「行けば」を *ik-e-ba* と形態素分析するならば、(19) という分析が可能である。この分析の下では、*-ba* という補文標識は TP をとると考えることができる。

- (19) [CP[TP[NP 太郎が][T[vik][Te]]][C ba]]

二つ目は、**等位接続の「か」**を用いた場合「ル形」が生起するという下記の事例を説明できないことである。「か」は等位接続を行うので、「ておく」(ル形)と「ておけ」は同一統語範疇を形成していると考えられる。しかし、一方は「ル形」というテンスを持つ TP である。そのため、等位接続の片割れである「ておけ」も TP と考えるべきである。

- (20) 等位接続

- a. 一方、スマホのアプリを利用する場合も、辞書を用意してておくか、あるいはブラウザで辞書を開いておけば良いと思います。⁵
- b. * […]辞書を用意しておけか、あるいはブラウザで辞書を開いておけば、[…]

三つ目は、TP に関連する**時副詞の生起**を説明できないことである。*-ba* 節には (21) a のような相対時制を表す表現だけでなく、(21) b にみられるような発話時を基準とし

た直示的な時副詞も生起する。アスペクトは事象と事象の相対的時間関係を表すため、「前日に」という相対時称副詞は *vP* (あるいは *AspP*) 内部に生起しており、他方、テンスとは話し手から見た過去・現在・未来を表す概念なので、「昨日」という絶対時称副詞は *vP* ではなく、*TP* に生起している、と考えるべきである。

(21) 時副詞 (相対時称副詞と絶対時称副詞)

- a. 朝イチとか、私も遠くから出勤してるわけで、その人がちゃんと前日に連絡をしてくれていれば、他の人を早く繰り上げてあげるとか、ゆっくり出勤するとか、色々できたわけです。⁶
- b. せめて昨日教えてくれていれば、今日の朝のドル円の急な動きに対応できたのって？⁷

以上の三つの理由から、(22) のような Cinque (1999: 76) の階層を念頭に置き、欠落説に基づいて日本語の節を分析しようとするならば、「-ba 節の中には *TP* が存在しない」と考えるのではなく、「事象条件節の -ba は、*TP_{past}* までをその補部を取っている」と結論付けるべきである。すなわち、三原 (2012) の (15) を修正し (23) のように改めるべきである。

(22) Cinque (1999: 76) (一部抜粋)

MoodP_{speech act} > *MoodP_{evaluative}* > *MoodP_{evidential}* > *MoodP_{epistemic}* > *TP_{past}* > *TP_{future}* >
MoodP_{irrealis}

(23) 形態素 -ba : *TP* を補部取る

さて、逆に言えば、(23) のようにさえ考えれば、欠落説においても主観性表現にまつわる機能範疇の条件節におけるふるまいを説明することができるということでもある。したがって、仮に後期 Haegeman に意図されていたように欠落説を退け、移動説を優れた仮説として採択するのであれば、移動説でしか説明できないような別の現象に目を向ける必要がある。そのような現象は 3.3 で見ることにする。

3.2 現象 (2) : 主題化表現

しかし、その前に、主題化についても考察しよう。2 節では、3.1 で検討した**主観性表現**だけではなく、**主題化**に関する議論も展開されていた。3.2 では、この先行研究を踏まえ、日本語の条件節の主題化を考察する。しかし、ここでも、3.1 同様、欠落説と移動説の説明能力は拮抗しているという結論を得る。すなわち、日本語のデータからでも、主観性表現と主題化表現に注目する限り、両者の優劣は決めがたいのである。

ただし、この主題という概念自体、議論がある概念である。そこで、議論に先立ち 3.2.1 において本稿の前提を説明する。それは、日本語には二つの種類の主題が存在するというものである。続いて、3.2.2 において、どちらの枠組みでも、この日本語の二つの主題現象を説明できることを確認する。

3.2.1 二つの主題

主題には、様々な定義がある。例えば、カートグラフィーの枠組みでは、主題は「節の残りの部分から『コンマ・イントネーション』によって特徴的に区切られ前置された要素であり、通常旧情報を表現し、先行する談話において入手可能であったり、際立ちを得ていた情報」であると、説明されている (Rizzi 1997: 285)。他方で、日本語学の中では、「主題とは、その文が何について述べるのかを示すものである」と説明されている (日本語記述文法研究会 2009: 175)。ここでは、Rizzi に倣い、次のように定義する。

- (24) 主題 (意味・機能的定義) : 談話参与者たちが先行談話において俎上に載せてきた、際立ちを得ている情報。それゆえ、談話参与者たちによって特定できる情報である。

日本語においては、通常、「は」が付いた句が主題であるとされる。これは形の上からの定義である。これに対して、意味や機能から主題を定義するならば、「は」の存在を主題の必要条件とする必然性は失われる。例えば、上の定義にしたがえば、下記の文の「これを」は主題であると考えられる。なぜならば、「これを」が指す内容は「談話参与者たちが先行談話において、俎上に載せてきた、際立ちを得ている情報」であり、「それゆえ、談話参与者たちによって特定できる情報である」からである。

- (25) 「は」でマークされていない主題

ジャズの草創期にはこのオフ・ビート音楽のことをラグ・タイムと言った。ラグ・タイムというのは文字通り、時間がずれていくという意味ですが、これはちょうどあるものがガクッと足を引かれて外されるような感じのものなのです。これをもし正しく日本語に訳すとすれば、「ずっこけた音楽」と訳すのが一番ぴったりするのかもしれない⁸。

したがって、(24) に掲げたように意味・機能的な基準から主題を定義すれば、日本語には、形態的に (26) で表した二つのタイプの主題が存在するということになる。

- (26) 日本語の主題

- a. 「は」でマークされた主題
- b. 「は」でマークされていない主題

3.2.2 説明能力の比較

この (26) で整理した形態的なマーキングの差は、(27) に見られるように、生起環境の差にも反映される。同じ主題という意味機能を持った要素が、異なる形態的実現を遂げること、そしてその実現形に対応して、条件節の中における生起の可否が決まることは、2 節で概観した印欧語の付加詞と項の前置、あるいは、CLLD と項の前置で非文性が異なるという事実と類似している。したがって、CLLD や付加詞の前置に対して、それぞれのアプローチが仮定した説明をそのまま踏襲すれば、どちらの枠組みでも (27)

の現象を説明することは可能である。(もちろん、2.1.3 と 2.2.3 で指摘したように、両者ともに、現象に対し明快な説明を施しているわけではない。)したがって、主観性表現だけでなく主題化表現においても、また、印欧語だけではなく日本語においても、これまで論じてきたデータだけでは欠落説と移動説の優劣を決定することはできないということになる。

- (27) 「は」でマークされている主題(山本さんを先行文脈で論じているときに…)
- a. 山本さんは3時に来る。 cf. 山本さんが3時に来る。
 - b. *[山本さんは3時に来れば]、彼も喜ぶ。 cf. [山本さんが3時に来れば]…

3.3 現象(3):「もし」と疑問詞との不共起

このように**主観性表現**(=3.1)も**主題化表現**(=3.2)も移動説と欠落説の優劣を測る基準にはならなかった。これに対し、3.3では「もし」が疑問詞とは共起しないという事実を観察することで、「条件節の分析として欠落説と移動説とを比較するならば、移動説の方が高い説明能力を持っているため優れている」という主張を展開する。なぜならば、欠落説では説明できない現象に移動説は説明を施せるからである。

3.3.1 事例観察

ここで考察する事例は、英語の条件節と日本語の条件節における疑問詞のふるまいの違いである。英語の条件節では、疑問詞を生起させることができない。これは、ifによる条件節においても(= (28) b)、疑問文型の倒置による条件節(= (29) b)でも変わらない(cf. (29) a)に見るように、倒置したshouldと疑問詞は主節においては共起可能である)。一方、日本語の-ba節のなかでは、主節同様(= (30) a)、疑問詞を生起させることができる(= (30) b)。しかし、疑問詞は-baとは共起できても、「もし」とともに用いることはできない(= (31))。

- (28) **事例1**: 英語 if (英語のif節では疑問詞が生起できない)
- a. *If I you should experience any difficulty, please let me know.* (Huddleston and Pullum 2002: 187)
 - b. *{Who *if/ If* who} should experience any difficulty, please let me know?
- (29) **事例2**: 英語 should (英語の倒置疑問文型条件節でも疑問詞は生起できない)
- a. How *should* things go well with me when my own child opposes my interest? ⁹
 - b. (*How) *should* things go well, it would be nice to see the likes of Darren Patterson and Keith Rowland getting a run? (Biber et al. 1999: 852)
- (30) **事例3**: 日本語 -ba (日本語の-ba節では疑問詞が生起できる)
- a. 誰に聞くの?
 - b. だれに聞けば、わかりますか? (日本語記述文法研究会 2008: 102)

- (31) **事例4**：日本語「もし」（「もし」が存在すると疑問詞は生起できない）
- a. *もし誰に聞けば、わかりますか？
 - b. ?? 誰にもし聞けば、わかりますか？

3.3.2 欠落説

先に、欠落説をとるならば、(15)のような三原の想定よりは、(23)のような統語構造を仮定することが望ましいと述べた。しかしながら、(23)の想定を採った場合であっても、なぜ疑問詞が「もし」と共起できないのか、という点を説明することはできない。

(30) b を欠落説の下で解釈すると、条件節の中には疑問詞が生起する場所が存在することになる。また、(25)からは、条件節の中には「もし」が生起する場所も存在するといえる。疑問詞が生起できる場所と「もし」が生起できる場所が条件節の中にある以上、(31)も容認されるはずである。しかし、これは非文である。そのため、欠落によって条件節の中で生じる現象のすべてを説明しようとするアプローチには、限界がある。

したがって、仮に移動説が上記現象を説明できるのであれば、条件節の統語分析としては、説明できる範囲が広いという点で、移動説のほうが好ましいという結論になる。

3.3.3 移動説

移動説では、疑問詞と「もし」が衝突する理由を説明できる。ただし、そのためには、下記の仮説を立てる必要がある。以下この3.3.3では、3.3.3.1において、この(32)の仮定が想定に値する前提であることを確認した後、3.3.3.2でこれらの前提を引き受ければ、移動説の下で3.3.1で指摘した事例が説明できることを主張する。

- (32) **仮説**：可能世界オペレーターの素性に関する仮定

日本語には「もし」と「 \emptyset （音声的価値を持たないもの）」という二つのオペレーターがあり、一方、英語ではオペレーターは「 \emptyset 」しか存在しない。そして、これらは以下の性質を持つ。

- a. もし： [+Q]という素性を持つ
- b. \emptyset 日本語： [+Q]という素性を持たない
- c. \emptyset 英語： [+Q]という素性を持つ

3.3.3.1 仮説の妥当性

3.3.3.2では、上記の仮定を引き受けると、移動説において疑問詞と「もし」が共起できないという観察を説明できるという主張を展開する。しかし、仮に説明できたとしても、前提として引き受けたこの仮説が仮定するのに妥当でなければその議論は説得力を持たない。そこで、この3.3.3.1において、実際に、「もし」に[+Q]を見出すこの仮説が妥当なものであること支持する根拠を説明し、後続する議論の礎を築く。

第一に、「もし」に[+Q]を認める根拠を説明する。それは、Haegeman (2010b: 607) で想定されてきたオペレーターの性質に「もし」の意味機能が合致するため、「もし」をオペレーターとしてみなすことには妥当性があるというものである。

(33) オペレーターに対する想定 (Haegeman 2010b: 607)

「Bhatt and Pancheva (2002, 2006) で述べられた世界オペレーター (World operator) (i.e. 私の用語では「非現実オペレーター」) は、Mood *irrealis* の指定部に生起し、(23) (引用者注: 本稿の (13)) の Cinque の階層における高次の法表現 (発話行為、証拠性、評価性、認識的用法) と重要な素性を共有している (引用者訳。なお、文中の「私」とは Haegeman を指す。)

(33) の定義から彼女は、仮定性にかかわる性質を持つものをオペレーターとして想定していることがわかる。「もし」は、話し手が「ある事態を仮定して述べることを表す (明鏡国語辞典) 副用語、すなわち、命題に対して話者が抱く仮定性を表明する表現だと考えられる。疑問詞の本質も、尋ねるといふ言語行為、すなわち、「わからなさ」の表明である。「かもしれない」に代表される認識的用法も、俎上に載せられた命題に対し真とは言えない、という話し手が感じた「わからなさ」が表出される用法である。したがって、これらの表現同様、「もし」にも「わからなさ」の素性としての[+Q]を見出し、(33) で述べられたような可能世界のオペレーターの一種であると考えすることは、単語の意味を考察すると至極真つ当なものである。この「もし」が[+Q]を持つという結論は、「もし」がつくる合成語が、以下に見るように、すべからくある種の「わからなさ」を表しているという事実からも支持される。

(34) もしも、もしや、もしか、もしかして、もしかすると、もしかしたら…

第二に、 \emptyset が[+Q]を持たないオペレーターと想定することの根拠を説明する。それは、「もし」のない条件文には、(35) a に見るように、話し手が事実だと思っている命題が現れることがあるからである。したがって、「もし」を使わず、 \emptyset を使った場合には、必ずしも「仮定性」があるとは言えない。そのため、「もし」には「仮定性」あるいは「わからなさ」の素性である[+Q]が備わっているが、 \emptyset にはそのような性質[+Q]がない、と結論を下すことには妥当性がある。なお、(35) b に見るように確定的な事実を表す-ba 節の中で「もし」を生起させることができないという事実は、「もし」に確定性と衝突する素性としての仮定性を想定する上記の分析を支持している¹⁰。

(35) a. [\emptyset 開けてみれば] なんのことはない、折れた剣の柄が入っていた¹¹。

b.* [もし開けてみれば] なんのことはない、折れた剣の柄が入っていた。

3.3.3.2 現象に対する説明

オペレーターは条件節を作るために移動を行う。2.2 で述べられたこの移動説の前提を引き受け、かつ、上記 (32) に表わされた仮定を導入すると、3.3.1 にまとめられた事例

は、どのように説明されるのだろうか。以下、移動説にこれらの事例を説明できる力があることを主張する。

第一に、**英語**の事象条件節を作るオペレーターには[+Q]を持つ \emptyset しかない(= (32) c)。このオペレーターが移動するため、途中に同じ[+Q]という素性を持つ疑問詞が存在すると局所性違反が生じる。そのため、(28) b も (29) b も非文となるのである。

第二に、**日本語**の事象条件節を作るオペレーターが[+Q]を持つ「もし」であるとき(= (32) a) は、第一に述べた (28) b と (29) b の場合と同様、移動が生じると疑問詞の持つ[+Q]とオペレーターの[+Q]が衝突する。そのため、(31) は非文となるのである。

第三に、**日本語**の事象条件節を作るオペレーターが[+Q]を持たない \emptyset であるとき(= (32) b) は、移動が起こっても、疑問詞のある節内で局所性違反を生じない。なぜならば、オペレーターに[+Q]がないからである。したがって、(30) b は非文にならないのである。このように、移動説は、英語と日本語におけるオペレーターの性質の差を想定した (32) という妥当な仮説の下で、3.3.1 で述べられた現象を説明することができる。

以上述べてきたことをまとめると次のようになる。第一に、3.3.2 で述べたように欠落説は 3.3.1 の現象を説明できない。第二に、(32) の仮説は、前提として引き受けるのに十分な妥当性を有している。そして第三に、この仮説に基づくと、欠落説では説明できなかった 3.3.1 の事例を、移動説は説明することができる。そのため、欠落説と移動説とを比較するならば、高い説明能力を持っている点で移動説のほうが優れていると言える。

4. おわりに

4.1 本稿のまとめ

本稿の目的は、「条件節の分析として欠落説と移動説とを比較するならば、移動説の方が高い説明能力を持っているため優れている」と主張することである。まず、Haegeman に見られた欠落説と移動説の説明能力を整理し、続いて日本語における**主観性表現**と**主題化表現**の条件節における生起を考察した。その後、三原 (2012) の不備を修正し、その上で、主観表現と主題表現からだけでは欠落説と移動説の優劣を判断しきれないことを指摘した。だが、「もし」が疑問詞と共起できないという事実を踏まえると、欠落説と移動説とでは、説明能力の広さから、移動説の方が優れている、という結論を導いた。

4.2 残された課題

留意すべき点は、あくまで本稿の考察から導き出されることは、観察された事例からは「欠落説と移動説の説明能力を比べると、後者のほうが優れている」という結論が言えるということであり、「条件節の分析に対する最良の説明が移動説である」ことを述べたわけではない。最良の仮説として移動説を主張できないことには、二つの理由が存在する。一つ目は、移動説には、2.2.3 で指摘したように、未だに明白な**回答を与えられて**

いない問題点が存在するからである。すなわち、第一に、項と付加詞で異なる素性を想定するためのはっきりとした根拠が挙げられていないという欠点と、第二に、オペレーターがどの位置からどの位置にどのような理由で移動するののかに関して明白な動機づけが説明されていないという欠点である。二つ目は、本稿執筆者が 3.3.3 で行ったようにさらに何らかの仮定が追加すれば、**欠落説でも事実を説明できるという可能性は論理的に排除できない**からである。ただし、本稿執筆者は、3.3.2 のように推論し、現時点では、欠落説による現象の説明を想定することはできないと考えている。

4.3 今後の研究

今後の研究には二つのことが求められる。一つ目は、**欠落説と移動説（理論）のさらなる比較**である。4.2 の最後で述べたように、さらなる仮定が想定される可能性があるため、欠落説が現象を説明できる可能性も潜在的には残っている。したがって、仮に欠落説による説明が浮上した際には、本稿で考察した移動説の説明とどちらが妥当であるかを、さらに別の現象を頼りに比較・検証してゆくことが、理論言語学者として最も誠実な研究態度である。

二つ目は、**考察対象（データ）の拡大**である。条件節に特徴的にみられる現象としてムードの問題がある。ムードは話者が抱くある種の「わからなさ」を表出しながらも、

(1) b-d で例示された主観性表現とは対照的に、条件節の中だけでしか使えない。今後は、付加詞や指定部の分析を、このような主要部の現象と合わせて論じ、統一的な議論を組み立てていく必要がある。その過程で、欠落説と移動説のどちらがより適切か、あるいはまた別の説を立てるべきなのか、という問題を論じられていくことが望まれる。

註

¹ この枠組みに沿った研究については、Haegeman (2010: 631) が、各言語ごとにまとめている。

² ここで言う事象条件節 (event conditionals) とは、「主節で表明された事態を引き起こす原因を表現している」条件節であり、これに対して前提条件節 (premise conditionals) とは、エコー発話によく用いられ、主節が発話をする際の前提となるコンテキストを明らかにする条件節である。すなわち前者はイベント間の関係を構造化するのに対して、後者は談話の関係を構造化すると彼女は述べている (Haegeman 2003: 319)。両者の振る舞いの違いは同論文の 3 章で詳しく論じられている。なお、彼女は、他の論文において、前者を中心的条件文 (central conditionals)、後者を周辺の条件文 (peripheral conditionals) とも呼んでいる。

³ 日本語を移動説の下で分析した遠藤 (2010: 5) は、移動元にはこの (13) の MoodP_{irrealis} という場所を採用してはいるが、移動先には CP の中にあるとする ModalP という場所を仮定している。

⁴ 三原は Haegeman (2003) で指摘された事象条件節と前提条件節の区別を問題にしてはいない。もっぱら彼の考察対象は、事象条件節について向けられている。そこで、本稿でもこれより先は、

イベント間の関係を構造化する条件節である事象条件節のみを扱うことにする。なお、日本語においても事象条件節と前提条件節で言語表現の振る舞いが変わることは、印欧語と同じである。たとえば、(i) のように主節で述べられる結論 (= 「なおさらだ」) の発話前提の導入に用いられる前提条件節では「かもしれない」という認知的モダリティが生起しても問題はない。

(i) 前提条件節／対比：オリンパスの元 CEO・ウッドフォード氏の高潔な、武士道にも通じる信念に圧倒された。反発や批判は誰しも怖い。ましてや、反社会的勢力(ヤクザ)が絡んでいるかもしれなければ、なおさらだ。(http://book.akahoshitakuya.com/b/4152092912)

⁵ <http://waiwaienglish.com/7mistakes-3706.html>

⁶ <http://ameblo.jp/shinwa-hirokawa/entry-11445714376.html>

⁷ <http://mentaltrading.biz/tag/fx/page/2>

⁸ 国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」LBm3_0011 より。

⁹ <http://archive.org/stream/heriotschoiceata35901gut/35901-8.txt>

¹⁰ この (35) に見られる確定性が「てみる」の意味からもたらされているという考えを提示する人もいるかもしれないが、これは正しくない。なぜならば、下の例に見るように「てみる」を用いても、その補部の命題内容が事実として生じたことを前提としない事例も存在するからである。

(i) 「てみる」: ちなみに現像前の情報は色情報ではなくたんなる輝度情報ですので、[(もし) 開けるソフトで開いてみれば] カラー画像ではなく白黒点々の画像という感じに見えます。(http://bbs.kakaku.com/bbs/K0000418139/SortID=15616703/)

¹¹ www7a.biglobe.ne.jp/~jiku-kanidou/S-S01.html

辞書

北原保雄 (編) (2004) 『明鏡国語辞典』東京: 大修館書店。

参考文献

Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad, and Edward Finegan (1999) *Grammar of Spoken and Written English*. New York: Longman.

Bhatt, Rajesh and Roumyana Pancheva (2002) Locality in Correlativization. *Natural Language and Linguistic Theory* 21. 485-541.

Bhatt, Rajesh and Roumyana Pancheva (2006) Conditionals. In Everaert, Martin. and van Riemsdijk, Henk. (Eds.) *The Blackwell Companion to Syntax*, vol 1. 638-687. Boston and Oxford: Blackwell.

Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads: Across-linguistic Perspective*. Oxford: Oxford University Press.

Cinque, Guglielmo and Luigi Rizzi (2008) The Cartography of Syntactic Structures. In Moscati, Vincenzo (ed.) *Studies in Linguistics: CISCL Working Papers on Language and Cognition* vol 2. 43-59.

遠藤喜雄 (2010) 「ムードとモーダルのカートグラフィー」 *Scientific Approaches to Language* 9. 1-23.

- 神田外語大学.
- 遠藤喜雄 (2011) 「複文とフォーカス」 国立国語研究所招待講演. 『複文構文の意味の研究』 ワークショップにおける講演. 神戸市外語大学.
- 遠藤喜雄 (2012) 「終助詞のカートグラフィー」 長谷川信子 (編) 『統語論の新展開と日本語研究 : 命題を超えて』 長谷川信子 (編) . 東京 : 開拓社. 67-94.
- Haegeman, Liliane (2003) Conditional Clauses: External and Internal Syntax. *Mind and Language* **18**. 317-339.
- Haegeman, Liliane (2006) Conditionals, Factives and the Left Periphery. *Lingua* **116**. 1651-1669.
- Haegeman, Liliane (2008) The Syntax of Adverbial Clauses and the Licensing of Main Clause Phenomena. Truncation or Intervention? Paper Presented at the 31st GLOW Conference. University of New Castle. 26-28. March 2008.
- Haegeman, Liliane (2009) Main Clause Phenomena and the Derivation of Adverbial Clauses. In Proceedings of the 18th International Symposium on Theoretical and Applied Linguistics (ISTHAL). Aristotle University of Thessaloniki.
- Haegeman, Liliane (2010a) The Internal Syntax of Adverbial Clauses. *Lingua* **120**. 628-648.
- Haegeman, Liliane (2010b) The Movement Derivation of Conditional Clauses. *Linguistic Inquiry* **41**. 595-621.
- Haegeman, Liliane (2013) The Syntax of Adverbial Clauses. Paper Presented at Olomouc Linguistics Colloquium. Palacký University Olomouc.
- 長谷川信子 (編) (2010) 『統語論の新展開と日本語研究 : 命題を超えて』 東京 : 開拓社.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 井上和子 (2009) 「生成文法と日本語研究」 『「文法」と「談話」の接点』 東京 : 大修館書店.
- 三原健一 (2012) 「活用形から見る日本語の条件節」 三原健一・仁田義雄 (編) 『活用論の前線』.115-151. 東京 : くろしお出版.
- 西山國雄 (2012) 「活用形の形態論、統語論、音韻論、通時」 三原健一・仁田義雄 (編) 『活用論の前線』 .115-151. 東京 : くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2008) 『現代日本語文法 6 第 11 部複文』 東京 : くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2009) 『現代日本語文法 5 第 9 部とりたて、第 10 部主題』 東京 : くろしお出版.
- Rizzi, Luigi (1997) The Fine Structure of the Left Periphery. In Haegeman, Liliane (ed.) *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*. 281-337. Amsterdam: Kulwer.
- Rizzi, Luigi (2004) Locality and Left Periphery. In Belletti, Adriana (ed.) *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures, vol III*. 223-251. Oxford: Oxford University Press.

